行李

七九

29

かくおほしいはさらぬこともなくいひいでてもなほあかん
ことゝもにおかしあはれなる物へとこゝろとなりし乃様なる
うゐていとおかしくさ夫みえ人の情をしるわ
事よりはしめてそのかくしの家へ参帰名なき
うれ文[以中]おもしろくなるよりつきてもきえくしく
ほうしもかなかなふさ後の事をおかし思ひは
なと物し給ふほど後ほまでさそ報ひも後なく
けさ座の形るほどもてなしとも見えつむよはきては
在こすましうりやなとおかしうへこふうれ志ほま
小大原野の御幸とて世よ残る人なくみさはくを
六条院すわまほのさくひえ出ほくみたまふうの

時よ出給ひて朱雀より二条乃大ちをめしさ侍り
おほぢたまふかはら河乃ほとりまで物見車隙なし
りやといふ事とかなしくはうしもわかぬをみこ
たちよ上達部もみな心ことによそほひをとゝのへ給ふ
馬うひ乃かうちつけかちさうぞくをかざり給つく
めぼしうよおもし右大臣内大臣大納言中納言
ろさましそのこゝろひつらふまほり給へつねはゆきの
上乃衣ぬえひきめ乃ましかさねを殿上人よ位六位
まそ見へわ雲たゝいさしょりはくうちちわて道の
さんえんあそうりみこ上達部なとくめのりかく
ほうひ給へ給えめつるしき物北ばよりひとゝ装

まうけたまふりうの事網とゝもはまうして世り
めなきぬはわ衣裳み上達部は気色こと也めほう
しきおかしきこと有るなるひおぼくそ凡人とも
なくうはあなあはれよはき車など輪あり
のしれは御達をなあもあわうきりしのもとなと
ゆきこのまうしうちさ侍よふよ義東あかうわ
まし乃あれ乃ひめ君もさ出給へまうくはとみ
ほくしたまへ給人のはかうち有様をかん給ふまのくふ
みかど(冷泉)のおほんき北御見せさわてうありしまうこを
后よは事ならうめになすらひ御車へ義人あしわの
ちゝおとゝをひとゝ上達はめをは見せさわたまへんまと

きゝくるしきものきよらは侍らねとそものし給へ
まと能はわりしいと人なりすくれたる人々にゝ
みしてはかしのうちよりかなりめうつふへくも
あくれましてかうちあはなおしやなとりのよ
こだちのきこえつるは心ばせも中かねなまぐれの
殿上人屋うの人はなめくもあるすきこわきさるは
さうりたくひなうおはし海とはかくら源氏の
おとゝの御うかさ海はこと物ともみえ給ひぬを
思なしのいまは猶しうはくしうふこしけなく
めてたふなわさはかくなたくひはおりしうきうわ
くわあそなるひとはゆえなりのきよきよけらひひとく

なべて物とのこおとゝけねなさとの御よほひり
めなきゝぬきぬへふをいてきこえともひのうさわなはまや
かうむかなしめえふともみえまくちおしきそ
をされなゝや兵部卿宮もおはせむ大将ひさぐらは
なもつきの下りよしめくもるふのようひいとなむ
見きてやなくひなとおもひてつかうまつりたまへる
いろこのろくひ老が能はみえていとんはよなし
いのてうは女の清くろひそて藤の色あひよは
ふさうんいともわなまよすをつき御んちふ
みおとし給ひて老わおとくの君のおりまわて
の給事をいつくはかくむ恋はりへさこゝ給ふも

あらてみするしき有様にやと思ひつゝけ給ふを
なきくるきはちなとなれはそこらまそ大かるに
はゝかりまはれは見をさまんはむかしかものなん
うしとも思ふ給ふにあらくて野にうおりしまうし
はまにては寒とゝめ上達部はひらりかたりもの条わ
はさうかくとも承御しうわの御しらそひなとり
あるためなれとり六条院よりはみき御しなる物
なとあるせたまの人まゐりふはかうまはらきかへく
かまては御ゝしふあわけはさと御物見のおしはは
参きさ給ふたまの人々成りわ老人の左衛門の尉をは使
小そきし一枝にそまはらき竹ふおはきをするまは

なまとりやさやうのおはわの事まのにふかりまはら
りしくなん

冷

雪ふるさきなりしかの山かりにはきしの心ふるさ
給ひとをふいさらにまよ大殿（オホキ）大臣（ツヽ）の御子はの御所
堂よはかりまはりてまいへはたかしなと思ひはわれるん
おもくはほよひそあらしこまわまてなさせ給ふ

泉

なりしかは山みゆきはよれしふ松原よゝ給ふはかりわ
なほ給ひやなかるむ御さうれこそほひまし　しれ
うはくらおりひいそくゝ給いひかことまやあらん
まるの日おはくめし乃御ふみよ眺白うんいみなきくるを
給ひきやうれつゝえおかりしなひきぬるゝむやとなく

たまへるこゝろさまさましにいとうちとけたる御
ありさまうるはしからしなけれてもあらぬよおかしき姿を
え給ひてはひなの事をとかくいひ給ひ始うらよくも
よしえのうろせ給もれうなとおかしさは思はれ眺日れ
玉 うちずうしあさきをわきまへぬ心きはさや
うかゝろの光座人らしおかけはかなき事ともに
なん心ゝあはをうんもみたまふえかくのことを
うしのうしさゝとも中意うくておそはまいくく
なかゝれおわくまはびんなのはへしうれおとくに
志かれても女きりゆくてみさふかひたまへるにと
ねりひみずはめかしはちなわりの人死さも尓まで

はゝのうまほうんにさうらはせ思ひなすうらんにはゝうんへと
わのえをわてえりけるにまでそおのふはあらし心
のかまへゑはなうるてめてすとみさはともきら給
もえ客ほうん思ひのたくむうかとさし返たる心
なうゝめとそわくひ給らそうこあしもうあてさこえ
然りんなこのうゝまひてみは返し
源 わうしをひうはうろふくもらぬをなとて
みゆきよめ給なうしうんな哉おかしそるにかゝ
たえれはとゝめ給ふとてもまうても究は生きの古と
こうゝとおかりしてうれ御まうけの借してうとの
ありかのきよしともきゝみえ給ふかなふゆき迄乃

さしよりはこはましはいとゝおもほえぬ事となよ
世の中のことよさけくりのみえしくめるをましして
うちはれとくかも座りてみえつ舟てまやしうせ
たそまほたてまし若菜よきはいとめてたう
御きさきまでなん申しのへわて二月かとお月を
女は哉さえ子のかなかくし給へ申せとなりぬも
人の法むかしめとてこもわおはさはとハうかうれ
しも氏神は清浄とめなきわうくなりぬ程をれ
二歳ニ正月先さき造すくし給へはりおり
よゐすもわうん小大原の神の法ニ給たりひぬ
へ哉もつ舟よはかくまて座むましき殿ゆりあ

なくまさとこふきのしきほの名まてうつてあなへし
みをくらしきき人のきたことりよ座うとてはうち
あらたむることのたて座れ哉もあまなとあかし
めくられよおやこみれ清教子のへ哉やうおしおあ
まハ我の方ほゆるして座志らせそてまはらんなと
おかしさうためてこみれ清こし給ひ小はのれおとしを
みん清きうくこきこえ御まのひけるは大変こそれ冬
ほのさよわみやこ給ことさしふをこわ給りまい
かくれよあすきてむんなの所へまゐり申し給へ里
中将の君もよふひかさ条よすひさゐつひ存まひし
さつ給ひうしなくりのし給てかわあし哉をいうよ

させまし給はかをせ世もいとさためなくゆめやもうき
おほくの御心かはへ参らせし候ながらそ物し
ふまりん候ともの御ことよすおかのこむおはすぶ世よ
この事あくりしてんとおもひしとかて三条の言よ
候ともつらひのてつらわくるゝ給ひいまして思ひやるかに小
小家まの給へとみゆゆるりあとつらいよりほしく
いよく光なのこちゑん給御あらちなどれは世よ
みえぬくちしてめぐらしうみまゐり給よはいやし
候こ地のなやましさもとの様らるゝんもちして
おぼえぬ方へ参り候けうそく小あへまぞよはきなまなと
物などいとくまくきこえ給ひしうはおはし候さしつま

ゝ承をなまりし此御方のこゝろきのとりしておほく候
おほく候さうぶけき寄ゝさぶめまいりのやうふ小物を
さを給よりもなんあまり候のなりまゐらせさ様候る内
などふもしと承りつみてな参候は家ゝきおほやき
よつうふ御人ともなくてこれ待参らせ候申ぬ
うみしうまさけくなかりて侍るよりひなと
こまよわきさ承人こしえぬまそうしまわあわく
ためし着もとも待めまいらせとあやしく思おほく志き
本性ようふもの、うさまなん侍るへきさなすと業きこえ給
年のはもかれなやみと思ふたまへはし月はよ
なかめるとこゝろしゆるかなかてはたのみすくなさ

やうにおほし侍れと一たひさまかくみえまいらせし
はべらぬ事もなくてやとおもひかへすも思ふたまへの
侍る程もふかうみえほしのひぬぶこゝちし侍れ
いまはおもしみえとむべきふしにも侍らさらは
ひとへくからも立かへまゝ世の中ならへおもふとまれや
たくひをたえうへまていとよけれはなしかし
見え侍しかはさうちいのをなむおりひとよかさま
侍るにこれ御中将のいとゝいたうにあやしきさまそ
思ひおはしけれはひはふみ侍ふよなん
はまくりけとくめしまていまてなかひ
侍れたゝなきりなまて御心のわなゝくも

おくかきりなきことなりけりともなけはいかゝしあはれ
なれ御ものかなしともおぼしいまそのとなりおはしめ
きこえ給つれてようちのおとゝは日へてそ宮わ
おほ事さけゝつむをかくなりつれては対面のあかくは
いまうれしうらむいかにてやまときこえんと思ふりの
侍るをさふらへ妻つ升てなくてはゆいめんもあるさ
けれはおほかたはなくてなんときこえおほかやまの
うとさけ後にやわさへしのちう給さしけしの
かうめまやかしもとつらひ物し侍られの給はは
へかうん事いなほさ御のこゝにうは中将のうか
めしたるは思されたるよりも侍ふ哉りしめ此事は

えりまとしこそげにやまふかくもてなすへり給ひてさ
うめあしなのとかのくさなくものにもつけれおこ
ふきのしまき居かりなくへかてはせ人もいひかけす
あら給なとりのしはまたとてふかとく給せうし
まわいかくたゝうき人のかんそうまて心えはなん
みたまのふかとこそ中將の御すともほしにて
の給へんうちわらひ給ていふうひなきにゆるして
ほて給すりやかうきて給わてきこえりさんなん
うまとめやわかしうせいときびしくいかさめ
給よしをみ侍し給ふふくさまそこともまさき給
らんせし人わろうき并思ふたまんてなんきわの乃

事ありはへりて後よめといふすけまさいらくい
さもとかくしはしき給ひさらむとは思たまへ
なりしかうくち御しきまうちのほ給ありまちとわ
ふかうも世へつまれをかいてきうるべい世なきほ
すありはべりてもすゑありなきいかちゆくかはめ
よ御座はく侍めきゆとおしく業給ふふなとも
給てさかいろれ志わ給へよ人をなん思ひ悔りふふ
ことはてふいりりたふきとわて給るなそれかわい
さかひかまさとも使りしは侍るしあわしうハはな
う地よ事れ志族をとうまうんさんすも給りて
種
たくさふものくさ乃すくなまをかことありても

なるほとおもひ給へゆるしておさくむほひも
みはらんしてとし月侍つるをいつてまさし
めしたまうちにおほせらるゝやうなんあはれ肉ねの
うみのみやほうんすゑ人なくてそれ取れよみつる
ことわけなく女官なとものおやきしくをほのは
はうりたまきなくすこし在うらなんわ
たはをたゝいまうんみこへぬこらうのはきこ人
みなは美人ことに候くにやしさはふさえのく
しうはえるうきなりんたは殺はたまふへよひと
なんあふな我家ゐう人のおほくう我うして家の
[illegible]なことそたるぬ人なんいましへよりなわきは

たはふんゐくうなうしころよりこのえらひもそは我の
人なりても年月のちうりなわのかゝるたくひ
わまとゝえのたくふへきもなしとあるえ太のこの
覚くさえるを侍りんかなんまちくすおほせ
られたわし我よけ御義事としもなようい思
給りんをつのへはさ候へきはちりそ上も下も思ひ
在よひ也なるう心たのきうなまゝおほやきはま
まそはふとゝ給のすをはつさとわきまはわさとれ
おもむきをえたくめさるむ事いそのくとのは
わかつきおやうにおほく礼なとのみさしも
はらんたく我身のはゝかり候ほとも給候の事

侍めきたと思ふはつき侍しは出てまかんよりひとひろかと
さやうにひま侍きはいの御しろきあへいすなり
なんおわりふどりのなんべいうとも中にはよらめ
まかしりけるは出てなくては對面侍へ義にも
侍る座りてうち御事さむとあらはし中へ武
やうと思ひめくらしてさうく中志をはなやかに
ふとはりて物うけよほまひ竹へまいりにお思しも
めんなうおりひとまわ侍るよ法花経のきさ翁館
はさいみをうり思ひなこを御つ出て小とかん思ふ
竹ふふさやうにつさんも乃きを世おく山と路さ
いのふく侍きるうかりしこまはらまいくほ

かく御きのわかすみ人をはやふ事なくひろひあは
めらるるにかかり御心まそうくひまたりへかさち
男ともゆんこの中にしき給うけおりわて成めさ
まやとぞこたまへんいさ御やう侍りさわまんしき
さ海いまれおとくもなのはりたつて中給ひてん
めさくえきさな残人のなりひめくたるうなり
侍きたあのさんよほきてもらうはしうん人いひ
つさん侍らむを中将の給ほりさるきわさきまん
しつせ侍らは人中ものこてを給ましと御くち
そきめやさ給うち北おおとのまもうく三条乃宮よ
おかきおとこわかおりましたるよりし中丈給て

いつかたかひし巻すていはつしき御ふたまのさきのち
うけ給らんごきんなとりしてりやしねさのし
ひきつくろふ人もりのくまうあらじのし中将ハ
はともかようものをうまはてめなとおもき給て給
ことものの君達もはまし うちはへたまきようち思ふち
うそまはま給御くるりの御みなみとさわぬへく
まかうをよき給のうちもまのいはゝ八義伐のへつまそれの
さはのしきやうなんなとのかなふ雅は大宮乃
御ふとあわ六条のおとゝのとふくひすりつゝ
物へふをものさめしけよ侍まいハ人めいとも御しうも
うつし巻ふうもあはをしとくしうかうやく

まかし巻給ふ事もわたかなかきこえたまのへつま
なる事にはあらむみひめ君の御事中将の
うまへよやとおもひしはなしやもうう世おほ
あけるそこの事とをちかのまひたしくもかく
うるぬはまりひとしとうちいそうるみ給りんに
とかくやかへさふ事もはらしつきまふくて
思いまぬをやるかき御はのしはさはへまは井て
わるい人の御事ともなひきかなにさくゆるしてんと
おほ臣御しきる給をさしわはきその給りんるらと
思ひよわたまのふりいとくいなひ雨なみつゝ世のみ
あをかさしもあくむと御はらさ給ひいさくし

すゝぬれはあやふくあゝ後なかりしきれとやゝやかく
のたまひおとしも對面はへくをかなすふゝやのこる
かことよろこひしけるに案わてこ義かはかくしきこえり
たさうハぬなとおりしなわてはさうらく心こしと小
ひまよはくろひくこきんなとも ことくしきこゆるよ
小はゆるてわくわ務丹ちいとはまるとひまよつきて
案わ於はまものくさうたのりしけなわさけだち
そうほうふ務し於よふとふもあひていとしう
とくありおりしちはゆまひなと大臣といふむあり
さうひたまのへ申恋ひ深乃御さうしぬ義さくらの
たさとおうのいとなりうさわひきてゆるくとこと

さうひたる御もてなしはなきうくきとみえ
たまへるよはゝ宗殿をはくらのうち北殿北はかくし
いまのやういろの御うひまゐかさのそしとけるよ
おふききえをうさいよくそとへんものあし完こう
まうわ於へかうきたてうまひきつくろひたまへる
はゆわはまよあれらひてもえこ務いさわりわ善達
はまくありいとものきよはあるはなりうひよそ
つとひ務へ里藤大納言書宮大夫なとこそ義こゐふ
はあどもしえ那なわ出はくも丸き務小ゐのはうら
まさともふ義り光したかく座んこしとなまよ殿上人
應人野なり於侍の義人上達部の中が羽林官ふとひとう

花やかにおはへをしき十余人ほとひかさねへまいた
りうめしうぼよくのたゝ人もむつかしくてありけは
あまりこたひなかの逢見奉る思ひよりかはてをのくゝうう
さいりひ人よすくれ給へふ所有様を物語よ見えてさ
おほくいめほしき御對面ありむしける
ありし世られてよろしくまてさうちのおほめするよ
侍きてりとましおぼ心もうふ色のゆまさむうひ
我こえ給ていかさみよりと見るほす（？）のかとく
おりしおはくきんのへそてなく昔りよ乃さらとくも
とうら給の御物語りて日暮けれ御ありてるなと
まくめ宗わたきのふさふりく いあしうわぬへいわ

くるをめしあさき小さくうわてうけ給りるさすくして
まうしは侍うりしやうなましと申し給ようしい（秘事）
さらなくこ侍まにかんうろしと思ふもおかをもる
なとくしきこえ給りける事よやいかにおかきは
ま侍りしうてありしこまわさ給さうま小そ物し
給せうしまわおほやけわさをしの事にはきて
こゝ給のへさてなく大小のゝきこえうけ給りわ
りは城なりし成やうまそおほやけの御うし給ふ
をもほうきま侍ふとなん思ふ給へしを末のとと
成て世のうみ思たまへしかいなかやうなる事
うちまし給まとうちゝくのわさくし事あり

こゝろはおほつかなし此ちつゝさしはそうにうほろふ
すなくなんなまとゝもなくてはもわ侍年出り
うへていはしへれすなん惡しうわん房を對面
ほそほこともいとまれりの見侍まいらさとをきわ
あわてよそ人は懸しふるまひとは思ひたまへなすう
さうしきかとをはそれはいきほひをもひまゆさ
ためなてよりいとかうひものしほそあゆるなん
うちえしこさむわくくはと老竹へえいうへは
けれりおもなきて御くさよまそなまけふつひ
ちつ給よ庵さけるすなく御諚きられしを
かくや姫よけつかうまつるへし哉らいはる哉なすへ

たるかたにゆきをよひ侍りてされしきけのへわみを
まいりのくしりうぬかまそうほ仕へのさまよひ
侍ておかや姫よけふつかうまつれわ侍しとありけんても
思竹へしつらぬ小はけらぬとちひの様つよは老き
出のけのうちゆるふすのこみんおほく侍ける
なとかしこまりわや竹そ此つ丹てりかのめう
出たまひふりわおとしいと老よめほうかなる事
小も侍けるのなとまほまち年よ姫てそれかえね
いつかなわりけんとたてま思ひ姫へしさ哉い
なふ此つ丹てゆの侍けんうきへ小さんはかうし
きこしめこきしんちなんし侍るいまはうし人

うひゆもあわ侍るにつきてはなかくしうしぬ
物ともれうくくふはきて侍まよひ侍る折のさく
なしくげんくはしとみ侍るにつきてもみさはふまの
にさうはくにつきてもあはれなり思ひたまへ
らるておわわゆうんてもまはなん思給へ出しはしと
の給はせのそありののいろしへの給ま契此物語よ
色ゝありし御むはしとのさため給おかし出て
なさきゝわらひこゑふうちみてまいらひぬ契いつう
ふきてとのくわかれ給ひしくありさまひてたひさ
しくあわぬふ世のふること思たまへいてゝまいて
悲し義すのきのひつかうまちたまむくちもし

侍ることとてかさくしやうはよはくかはしまさぬ
六条殿も思ひなきまやおさかたま侍ゐにこまはて
ひめ君の御事をおかし出るよおわしふまうさは
御有様いさみひをきかはりおわもとのあはしく
とくめしくさふくとなき義たまふ御まのこ給もい
けまこ給ことなわわかゝ侍つ井てなまと中将乃
御事をいうち出給ひはあわぬひとかしくういい
なしとおかしをなてゝまいらくちいまんすも人
わろきおかしとくめすれおとくるさ人のはくしぶ
なまいりいうしすうしたくてさはうふむはほくまい
さふんちし給へわと契も御ともまいらせぬ

へ文をうちつけまたはうしろやとてなんとふの
うしこまりハことさらみなんきのいたへくるしと
や妙へいさらはこみたなやみをよ給しうみし
給をかなりし歳こえ〳〵日うりへさせ給りんわくわ
たまのふへまよしやすき姫のわ給ふは気色とおもうて
女のくいそ給ふひこたいとのめしきみたちの
はらものゝ人ゝもなる事をはさるなりむめはらしき
御あれめんありいひとは巻てまよ巻なりわはやふいみ
いのなるは山はわ有へ夷小のなとひのきらう給えを
志ほくらし添はちとはありひよしさわたわれもしき
うちは巻まゐとゐふしう心許なくうち光し妙へと

ふとしこのうけとわれおやうらむもひなりつむ給え
給へはく世はしめ我思ふよさためてこ給きよう
みえなちふ殿えしやむことなまうさくをとく
うわてうけりわてうみきたりいもそなきをこは
うまと徳りしうものゝやさを思てうくはりし給
おめわとおかすいくちおし　かまとそれをこひせ
をへ夷事のはあとさるまものみにはわるわよかまと
はくきんふあとりおもむのおきらん宮はうへきよ
ふもおもむき妙へらえ女房なをとのむほさんすると
あ姫よ申しやむおかをせとゝもかくも思ふわの給りん
なきさてをたゝの姫へきこうらふとよ給河ありおかし

かくわかく乃たまふには二月つ廿さらに御出家わ
十六日ひんの乃たしめまゐらせよと其日なわくわ
ちりうるよき日なりとうらの人やくはうちより
よ給しうおはしますはいふきたち給てきんの
わうわ給てもおやうにわけらいしき俺なといと
なまめかしあへき事ともなし　へきこえたまへは
家なみ御しき給はおやとゆえなりくもあわれさ
うき世をとおもひ出給へりいとなむあわれなる
なくて給ふ御かたのきみも志のひてかへりのちの
こ給乃給ひまうらせくわおやし乃うすともやせんと
あわれわと思おりはふすともしあはれよりのつま

まよ人の御有様よりもなかもあはれに思出られて
おもひよるさわ参る事をとしまゝくさきんちも
されとあはれさしうのちぞ給へきたなわくわと
思かへすらうはなのこさまあくさらめまゝ
うくて秋の日よりて三条の宮よりわ志のひやかに
御つのひあはれ給りしのすこなと小はのなまゝと
事ともいと聞えさにしたまひて聞ええんにも
いまはくさゑあはれはまをたふは志のひうゐ侍ると
さ給ぶこまてもなのきぬめしつわをおかしゆるさ
へうやとてみんあはれよ参てはおらめ給ははちを
う聞きこえんもいつくはりしおもふことのひてなん

かさのたよりいひまてゆけいたまはくしけ我身
すゑきぬつけこなわくわとおもふるめしつわか
あさきの〻たまのくふを扇もこなこえりおはしまして
事とも仰論んしさたむる様なれはみたまのふさ
こぶれあり仰ふこりきさなきとおもふしやこれ候
てよせうしいよそえりものし給ふるを年有
らんてあやしくおいゆく物よこうはわるまゐらと
うく仰まふ給ひのくるわなきうちゐしみまゐらひて
ちくもふまくしくるまゐりまゐるれ三十一字の
なりけるむらもしはすくなくらん給事の
ふるい花なわとおほひそわしひ給中宮すわしおほさ
はるのころ幾ぬはさうちくはらしはきれくあとおもと
みなくてきえぬのはかともありしのなれ物思ひ給
ことにかなはぬふかく事わ給へは侍りさくしみえぬ
あら給くくにさうらく人〻みえまうりくしあふき
ますとわくくふたいそ姉へ御有様をとりまゐらせ
はまくくふはきてはへうわの侍ら給ふきとらあり
いとみえはくし給へまいおりしりみゆ給を上東門院の
人〻もあら給はいつ幾は紫式部なとももとらひ
宮にまゐる八幾の事をなるまゐらたくまてすくし給よ
花陰宮の御かくあやしうりのうはりしうこゑ
へきき事のあはすくきぬこたいの御おほ給まて

いかてかこれ御いう義をよそのうすとハやすく
さんとおほしてうたのあとなんしいて給ふる君
めるはうら給さしあわしハ哉よひのかうなう
ひとかさ〳〵おちくわかうのやなよとのやせうしれ
人のめてたきけふおりを乃そうの御一首むつまさき
のこうきわみゆ家あしまちれ御こうち事とよれ
哉きこえりいまてほくえいとうふけしうて事れ
行人もいふこまはきうせ給へまうんふゆねうらハ
ほくうしはまとかく家おのハおりひたまへしのひ
うるをなんこまをいと何やしはを空人ふゆ給えせ
まとおいうかなわ哉御しぬえしつきさいとあさ

まつう例のことおほき小ゆのかおきみぬあやしき義
ゆる人ありきうはまふくものはるゑしたる人ハ
ひさいりわちはこいまたることよなまちいうふえち
ふまーしやとそかへかうハはのなきりしたなく
思なんちてみこのいとうなしうち給ふ思出まハ
人はおとさんはいとんなるしき人なわと哉給
御こうち事れぬめとり例のおなしすちの
哥すわかわ

（まつム）
秋力ちうしろみちまけはきつ君のたもとに
なきすみおもへはれてそむよし・・何事し哉
いかるまわなうきてうかえゑぬ・かのうつよううたう

う義ゝ御まへ申上おもしろくもなくきものゝおかしさなとハえ
もんし候まゝこのうへさまんつゝむ候まゝまして
いまのハちうゝなくてとゝ候をうわほにむかうゝいとゝ
おしうわ候ふいそはなすれさはなしまとも
なきんせめいまひてあやしう人の思ふ候ましき
御ここ候なへ推そうてもわかぬ義す事れと
ゆくさきのかなて

係

うちゝ候まゐ文うちゝ候もうゝ君の人近くも
うつ衣なほとそいとまめやかのふうれひとのたつゝ
これむほちなきハ物しそ侍る事わとそみせなわ
候へい君いとゝ申かひ座まいりわかひ候てゆかいせ

おしなうしゝ候座うゆも侍るの所とく候し
うわ候よしなし事いとおかうわ座内のおとゝハ
さうしもいつれ断まいれ清んなまとめほうゝのふ
中候しないはしの申御心よなくまたまいハ
とく参わたまの人まきしれなとあへいかさわあり
侯義てめほゝしきさ海にこれさ申まいらせ候まへまけよ
まさと御ちう候ゆゝめ断れ候すとかへたまうふも
かさし参なふ物りしやうのはまそおほさ候いの
時よう内よいまいらせ候御例の清まうけなへさ候りの
まそうち乃おまのしいとよなく志ほらもせ候て御し
はのなまんうゝきたまの清となかうまいら乃うつゝ候かしく

まれはほうし見みさそありしお經よみて有し事に
たまの人つといかしうゆうしう思ひやそ給へとと夜ハ
いとゆくまりなんいかれひまもはひ給ふとえ思ひ
思ひ出ぬ氣色なりあはれし乃おもとくと夜ハいみしへ
さ海のうすかけ侍るハなるにおやさもうつのさき
給ましくなんこそ侍らぬ人めをうきさへそな我よけ
はなのさかりかとやうし給ふ卷をまさうりやみえさを
屋ふへよりうし侍るをなん清すりける卷をいふ經ぞ
おきてわたりましこまわ有ハ世よなめしなよすと
やみさ我なりつるいまそかくものひこめさうさ有まのひ
名府にもいつしうん侍るき世ときえ給

門大紀

うつめしやお我ほ出も我のほくきのそ成のくれ
名はほまのきつ給よとそな我ほくこもおへにさに
有結ひぬ見をいとうつし紀ほ消様とものうす
はとひはうきさにえ宮え給はゝは夜

源

よ風へなきかく風なきさりおよせてはまも
給ぬ藻をほとりみしいとまわ無よ御うちつき
事よなんと我こえ妙へそいにとりはかなんと
我こえ御風うきなくて出給ひぬみこたちほざく
人へおわなくつとひたまの人つと清けさう人も御まう
ましつと妙へ又ハこ我おやさうのくいつとかなしいて經
小風とゆのなふうみのとありひうりのひ給へつと

うの夜の君たちけるほどの君りかうかれこれにおはしまし
きこゆる人さまは思ひし事ども、らうたくれしも
思ひなかばに侍るにいとゞ心もちさわぎたるとさしめきて
侍まゐとなるかたにもこのこともかゝり中宮に
御したしくひたりさてかりんとやむかすらむかしに
ものくるふかりしをあはれかへ見かたにけしくは
心つゐひしかひて世をそしりになる侍まりまて
かさね物へなよるにもあらぬ御心にさかとれ人あり
みさわかりしともうくも侍へめまゐらすなさるを
うなさをもさまゝくの人のきてえなやむさきたく
なるむすれはあちおかきをかさうらりやうく

人めをもなかれなんよりおはす小侍へきとすかへハ
たく侍まそかしけりなんとさうひそんかへりまかう
まて御らんそゝまゐわのこときたえなくのんすくやうく
かへ物わかばもさきの世の契なるかなうし心うら
申し御心にはよく世物をも更にもいりはすへてひさ
出物かくともあれくり侍まて見に出御るり侍
あまたとみことをたん小かくさゝ物かへ皇大宮の侍
かやこりことつる物し名物もあまハさらとく
しきはあつひなとはなし元部へ宮いまゐいしと
侍けるわかへ事とこかわもかきをかゝるかわかさち
なくらえ物へとうちよわ侍気をあは事をのへさひ

をかしうこそなまめく候事よ心こそうひてなむ
あとはまれ事ハともかくも思さたむへき義ともなし
侍るを語る給ちぎりにハほれりのなりし恋をいへり
てさやのふみこんなるこそかなふこともみし語りて
あうすてあとくくよくもてなし相思ひさしなきと
中ゝ心許なう悪しう思ひやそ語りものうこの侍
夢もまことにあかしあはせなはなれわかは
さうりなるすれさ女はやと語りわ世の人まつり
志りしられしといたさしきちにこゝあ語へとくち
侍りなきりのハ世乃ひとなわなわ志まんりいひ
のらし侍く風うくきこえむなる我こゝれ（近江の君）されなれ

物のあきまて女房しれおまへに中将かねさうへひ
語りいそきそ殿ハ侍むとあまうきたまへはなわ
はなめてたやうのなき人ふさうたりもそなさは
らん義けはられもおとわりう成とあふなけふの語
女ハ女侍なるはうさしとおかりして物もの語りん
中将このかし侍のはへききならすりの志纔ふらめ
さそもたらいひし事をかくゆくつきなく赤いそ
語ふそ我いひたくなうぬ女房なともこうゑて出ゝ
むまとの語へハ御かふ（御匣）の御兄弟きこて侍るなりしの
すみよなるへのなわ宮侍のへふとりきいてたち
侍しうハさやうれ侍かへわみもやとてこうなく

てハ女房達たまはりのうまはらぬ事ありてわかうち
はりのうまは達はた斎のつらをわりし御せにわと思ふ
あくきハやんにはくゑんてなりしのかとおもふになま
うしらよりのうまんと思ふをひさうふもおほし
うけ人御のふとの給ふりうらちてめてたかは
守ふ殺なりぬ人ハまうしふまうしのわりなる中将此君う
はらくおはさ御さりさらみむうへ給てう給めあさ
くわ給ふきうく此人いえふそふまし我との
うちのなはなりこくとさわへ御り以うわ
しうおさくみ申こせ給ふくけるにけきといとうる
あしくまよまし思ひきあけうわ中将ハ京く以ふり

はなてもけましおやまわら御す心思へはまめ
やかにそ物し給おねかう御うさてもたくひ
あきは右撲我を給のまはるもおかさしはらう給
さはめてこうりさきいはかもあは雪よみし給へきき
御しくしふなきはとくうおもひのかひ給ふ時もさ
なんとほくあんていひ舟たまの人申中将もはまは此
いはさうしこりわ給なん座めやすくとてたち給
ぬ達はわ給くとかまてこの君たちさへ此をなう
さ給ふよたくはおのはさう給の文よおはしまきハ
さふら殺なわとそいとのやすくいうし文下らう
わうえへなとの原のうまはわうへぬぶう座くあも

さらぬゑわ座れくまとひはわきはくさゝ越さしを
はくしてみやはらんしおわきそ内侍乃のみなり
そのまゝをすかし給へとをあ哉ゝ宮まハおさまりう
いつか思ひていふうなるむとむほとりりのも
いはま給いれおとゝ此乃ちんを来ゝ給ていとそふ
座ふ小おわらひ給て女御の院かさま来わ給へ子
つ并てよいはらこれおふこれ気こなるゆとめきは
をとりとけさやうふきこえて出きたわりと院の人
たるみきりひおかやまを人まそまをいまあひたらん
内侍のかたのすハなとりをのれりとく老もの
きさわしといとまめ座りまそのさまへたいか

これしと思てさもは気を給ふらきまかしうなし
うちこれ女御座なとなのはかりつるへはこはを
給てんとたのミふくまそなんさらひつかをなは
へまよ人りのし給座うまきて給まハ姿ふとう
たるくちし侍てなん脳りまと画ゝ合やうなり
侍るとやし給ふゑさやわいと物さは座すなわゐゝ
給ひぬへまよなまんしていとあやしうおかはり
ゑきはなきなわやさもおかしの給いまうハきの侍
人のさきり給うしてましおかさあとしの御
むはめ座んしとなくともこゝにきちよゆさん事い
きゝしめさぬ座う侍らさうらし二ゝまてもなゆし文を

とかはかく思そひくしきやう義かくされよなかうてこ
なとの安楽りんおうんをは読んきんとはなれてさゝ
楽りうんへハそのうちわりなきけれてはおはし
まのをハおとしいはしようすりし楽ふ人のおかやきおく
かさわるおら座やまとうさいあやしくきはし楽た
おんむまくしきかさのすかき盛るのやゆうきを
楽さくはまら息のやうまて布とくをかかうふら
付るむとそ手跡をしはわくきさらえ丹たまのへ里
み本丁のし後なとまそきく女房ぬへくおかは
物かるひりえぬハはんへゐいてまおんおくさあ
たる世はもはおもてあかうそまわなうみく偏しと

おかしくおとのも物むつうしきおかきおふこの
君ゐるうよ後漕まきふれとそたくかうひくさり
つくわたまへと世人そはちかてうけしたかめ楽
なとはまくらひるわ